



桑原史成氏……

三十五年の七月、水俣に飛び込んでゆきました。

◇桑原さんは大学では農業土木を学んだ。在学中から写真にたまらない魅力を感じて、夜学の写真学校にも通ったという変わり種。水俣にやってきたのは学校卒業直後である。そして一カ月間、漁民の生活の中に溶け込む努力がつづいた。日傘のスパイと間違えられて困ったこともあつた。

もって行くと採算がとれないと断られたりしたこともありました。しかし三十七年の秋、富士フィルムのキャリ―で展覧会を開くことができ、一部の人には見てもらえました。このときも日経連から富士フィルムの幹部に安定資金交渉の最中だからやめてほしいと申し入れがありました。が、押し通したわけです。



◇私が水俣病の写真を写すことができたのは、熊大の医学部の徳臣助教や友人で同じく水俣病の社会的背景を調べている宇井純氏ら多くの人の協力があつたからです。そういう支援がいっそう私に水俣病と

使命感に紹介水俣病

桑原さんは熊本県津和野町の農高校生までを歩いたこのいなか町でも桑原さんには特別な縁を結んでいり。

私の郷里の鉱毒事件が私の脳裏に深く刻みこまれていたのと同じよう。水俣病のことを聞いたとき、これはたいへんたと思いました。水俣病は水俣だけの問題ではない。日本

た。が、むごたらしい産業災害の実情を世間に訴えよという桑原さんの姿勢が理解してもうえぬはずはない。あなたには味方なんだね、と協力してくれるようになった。こうしてとりまぐつたのが水俣病写真展の作品である。

◇写しはしたものの発表の場がなくて、二年くらいおとなになつたらとていすよ。出版してついでに出版社に

◇くわはら・ふみしげ 昭和十一年生まれ。三十五年東京大・東京綜合写真専門学校卒業。日本写真家協会会員。二十七歳、熊本市鶴原権し場で行なわれている熊本市教育委員の会場で水俣病写真展(四日発行)を開く。

本の産業界の問題、日本人みんなに知ってもらわねばならぬことだ。さう考えて